



### ◆「リットルの涙」

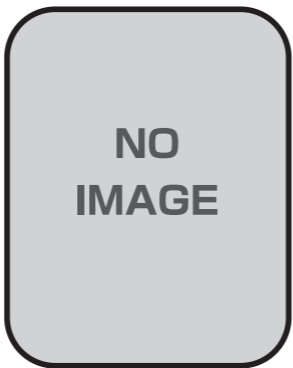


川根高校3年  
山田峻

「リットルの涙」の主人公である木藤亜也は難病と闘った。少しづつ病気の兆しが見え、だんだんと体が弱っていった。体が弱りながらも亜也は、自らの決心、自分への励まし、反省、感謝の言葉などを、手が動かなくなる瞬間までノートに書き続け、そのノートの数は計46冊にも及んだ。

亜也は、楽しい時は笑い、辛い時は涙を流す、私たちと何も変わらない一人の女の子であった。しかし亜也は、辛く苦しい時も決して諦めたり逃げることはせず、何事も前向きに考え、絶対に負けないという強い意志を持った笑顔を絶やさなかった。辛いことや苦しいことがあるとすぐにマイナス思考になってしまふ私は、亜也の前向きな生き方に心が激しく揺さぶり動かされた。

現代では、あまりにも命を軽く考えている事件が多い。例えば、いじ



一般の部 小笠原聡

### ◆「瞬の風になれ」

無性に走り出したくなった。まるで、体の底から湧き上がる「何か」に突き動かされるように。

小説を読んで、こんな気持ちになったのはいつ以来だろう。ちょっと思い出せない。この「瞬の風になれ」は、陸上競技、とりわけ4継と呼ばれるリレー競技に青春をかけた高校生の物語である。才能豊かな兄に影響されサッカーに打ち込んでいた神谷新二は、いつの頃からか自分の限界を思い知るようになる。そして、スプリンターとして類まれな才能を持つ同級生一ノ瀬連に誘われ、流されるように陸上を始める。

神谷と一ノ瀬は、互いに刺激し合い、ときにぶつかり合いながら、いつしか共に神奈川の頂点に登りつめていく。この物語は神谷新二の成長の記録である。

月日を重ねるごとに、おぼろげだった目標や夢ははっきりと形を成し、やがて小さかった頃の、ただ走るのが楽しかった自分の姿を思い出す。挫折や苦難、重圧、仲間とのすれ違いやライバルの存在、尊敬していた兄の怪我など、目まぐるしく変化する環境の中で、悩み、もがき、それでもレインにすがりつき、

めに関する問題や自殺問題などをよく耳にする。家族からの虐待や友だちからのいじめが原因で、自分の未来ある命を無駄にしてしまうのは本当に悲しいことだ。亜也は生きたくても生きられない、また世界にも生きてたくても生きられない人がたくさんいる。私はいじめている人や相手の心を傷つけている人に、ぜひこの本を読んでもらいたいと思う。この本を読めば、命の大切さや尊さ、生きていく喜びを感じることが出来るだろう。そして、今の自分の悩みが、生死を分ける病気と闘っている亜也の生き方を見ると、「頑張ろう」という強い希望を抱くことができると思う。

そんな亜也も、苦しく厳しい闘病生活の中で、自分の思い描いていた未来の理想と全く逆の人生に絶望したこともあった。「生きていく価値がない。生きがいない。迷惑人間だ。」と、自分を責める日々であった。しかし、どんな時でも「どうして私だけがこんな体になったのか。産んでくれなければよかった。」などと、他を責めるような言動は一度も出したことがなかった。苦しみの中にも、両親や友人を思いやる優しさこそ彼女の心の強さではなかっただろうか。

真つ暗闇のトンネルをひたすら手必死で走り続ける神谷新二。そのひたむきで切ないほどの情熱は、読み進めるほどに私の心を焦がし、くすぶっていた情熱に再び火をともし、素直な気持ちを真正面からぶつけられたように私の心は揺れ動く。どのページの、どの行間からもにじみ出てくる神谷の熱い思い。「強くなりたい」「ライバルに追いつきたい」「仲間と共に分かち合いたい」「ずっと、進みたい」。

そして、私は同じ思いを抱いている自分に気がついた。年齢も環境も舞台も、何もかも違う神谷と私なのに。バドミントン。決してメジャーとはいえず、どちらかといえば軟弱なイメージがつきまとうこのスポーツに、私が出会ったのは今から遡ること十数年になる。遊び半分で始めたこのスポーツしかし、その軟弱なイメージはすぐに打ち砕かれた。技術と駆け引きを要求される、常に動きっぱなしの汗だくのスポーツだった。この十数年、ただ一球のシャトルを追うことが何より楽しくて、思い通りに打てない自分が堪らなくやしかった。試合に勝つたびに喜びに奮え、負けるたびにくやしさを噛み締めた。のめり込むのに時間はかからなかった。

社会人から始めた私は、クラブの練習についていけなかった。大会に出ては負けの日々が続き、落ち込みもした。大きな怪我をしてもう続けられないかと悩んだ時期もあった。今、始めたばかりの頃に比べれば少しは上達したかもしれない。体も少しは強くなった気がする。でも私は一つも満足したことがな

探りで掘って血だらけになり、傷ついた体を癒したかと思うとまた次の障害物に突き当たる。何とか光を求めて「あっ、これが自分の探し求めた生きる道か。」と願ってここまで来たのに、たどり着いた終着駅はあまりにも厳しく残酷なものであった。終着点まで長期に渡り、大変苦しい思いをしてきた。その度に亜也の母は、彼女と一緒に泣いた。転んだ時も起こしてやりながら一緒に悲しんだ。そして動けなくなり、ひんやりとした廊下をはいつくばって動くようになった時も、母は亜也のテノポに合わせて一緒にはいつくばって歩いた。子どもの前では涙を見せまいなどと立派な態度はとれなかった。そう。亜也の苦しみも辛さも痛いほど分かるから、それが自然の形であり母親の姿だと思っていたからだ。

亜也の生活を助けていたのは家族だけではない。病院暮らしは仮の住まいでありながら、亜也にとっては生活の場であった。そして、一緒に住んでいる家政婦は母であり、家族と同じような存在だった。家政婦が用事で出かけ、数時間して帰ってきた時の亜也の嬉しそうな笑顔がその証拠だ。このように、亜也と共に病気に立ち向かった人は家族をはじめ、家政婦や医者など様々な人たち

い。手強い相手に出会うたび萎縮する自分が出る。負けそうになるたび弱い自分が出る。どうしてこんなに弱いのだろう。自分に自信が持てないだろう。常にその思いがあるからこそ、続けられるんだろうけど。この物語にはこんな感じの言葉がある。「陸上なんて、9割が苦しいことばかりだ。でも、たった1割の喜びを見つけたくてやっているんだ」神谷が下級生に向けて発したこの言葉。

実は、自分が説教されている気がしていた。長いことバドを続けてきたが、嬉しい瞬間なんてほんの一瞬しかなかった。ただその一瞬を味わいたくて、ひたすら汗を流し続けた。でも、もう歳なのに……と思う自分がいた。ちょっと疲れた自分がいた。そんなとき、神谷は優しい目をして私に問いかけてくる。「君は何のためにそんな苦しい思いをしているんだい？」

答えは、バドを始めたばかりの、私の心の中にあった。「強くなりたい」引き出しの奥にしまいかけていた思い。自分に自信が持てなくて、趣味で続けられいやなんて、自分にウソをついていた。前に進むことから目を背けていた。でも、自分の中にもこんな素直な思いがあったことを思い出す。神谷新二に教えられ、私はもう一度走り始める。

私は私であることをあきらめない。ただシャトルを追いかけられるのが楽しかった、あのころの気持ちのまま走り続ける。私のレインの先には何が見えるのか、それは辿り着いてみないと分からないが、今はただ、目の前の長い道をもう一度走っていききたい。途中、立ち

だった。そして、みんなが彼女を支えたのだ。亜也自身の努力はもちろん、他の人の支えも大きかっただろう。

母は、「亜也は、本当にびっくりするくらい何事にも一生懸命取り組んできたんだ。五体満足でのほほんと生きているお母さんより、よほど立派な生き方をしてきたんだ。だから亜也に教えられることがたくさんあるから。」と自分を勇気づけてやることによって、苦闘の生き様をつづったノートの整理にかかった。

「人に話せるような立派な生き方は何もしてないし、いつも泣いてばかりで、やれるうちにもっと色んなことをやればよかったと後悔の人生だったから恥ずかしい。」と、亜也は話している。しかし、私は亜也の生き方が恥ずかしいものだとは決して思わなかった。限られた命と向き合い、精一杯生きた亜也の人生は、逆に誇れるものだ。亜也の懸命に生きた人生に触れて、今、私たちに足りないものが何なのかが見えてきた。そして、前向きに生きようという希望が見えてくる。私たち人間は、いつか人生の終着点にたどり着く。どのように生きるかは人それぞれ違うだろう。だが私は、終着点にたどり着くまでの時間を大切にし、今を一生懸命生きた。

止まったり、振り返ったりを繰り返しながら。不器用な神谷新二と同じように。今、毎日のように練習に出かける私を快く送りだしてくれる家族に感謝したい。競い合うことで、私を強くしてくれる仲間たちに感謝したい。バドミントンに出会えた「導き」に感謝したい。バドミントンに打ち込める体を与えてくれた両親に感謝したい。そんな気持ちを思い出させてくれたこの物語に最高のありがとうを贈りたい。

物語のクライマックス「南関東陸上大会」で神谷新二は大きな花を咲かせる。全国インターハイ出場を勝ち取り、新たな目標に向けてスタートを切る。その先は、この物語の中には書かれていない。でも、読まなくても私にはわかる。神谷新二は、私の心の中で、さらに強く、さらに速く、成長し続ける。力強く伸びやかに繰り出される、そのストライドさながらに。

そして、私は勇気をもろう。あきらめるなど闘志をもろう。もつとやれると気力をもろう。いつまでも追いかけていこうと、神谷の背中が語っている。

私は、その背中を見失わないように走り出す。いつか、私が自分のゴールに辿り着いたとき、改めてこの本を読み直してみたい。そして、今度は私から、神谷新二に問いかけてみたい。

「少しは君に近づけることができたかい？」と。今、私の背中を押す「瞬の風」を感じた気がした。真つ青な空を渡る、限りなく透明な風を。その風を受け、私は、無性に走り出したくなった。